

今夏、農学生命科学研究科附属緑地植物実験所の「花蓮 歴史と夢」リーフレットに使われた『牡丹蓮図説』について、いくつかお問い合わせをいただきましたので、ご紹介します。

『牡丹蓮図説』について



この史料は現在耐震退避のため
閲覧できません。ご了承下さい

東京大学史料編纂所

なおあき

1854年7月、前の新発田藩主溝口直諒（当時隠居）が、江戸藩邸の池に咲いた蓮の花を自ら写生したもの（東京大学史料編纂所蔵溝口家史料）。

なおあき

越後新発田藩5万石の第10代藩主溝口伯耆守直諒（健斎、1799—1858）が自ら写生した紅白の蓮華図である。景山は直諒の号。直諒は1838年、40歳で隠居し、江戸木挽町にあった中屋敷（現在の銀座8丁目付近）に庭園を造成して偕楽園と命名した。1854年の7月、偕楽園の池に牡丹に似た八重の蓮（俗称牡丹蓮）が咲き、直諒はこれを池に浮かんだ小舎水月亭の窓から観察している。跋文には、蓮を愛した中国宋代の周敦頤（茂叔）の故事が引かれ、牡丹の富貴さと蓮の君子ぶりが相付き合い、雅俗ともに愛すべきものだが、実際には「雅にて俗を帯びる」というもので「珍奇」とするべきものだろうと感想を述べている。直諒は数寄者としても知られ、狩野派の林勝麟らを絵師に用い、茶道具や石盆栽、刀剣の拵えから魚・鳥獣画に至るまで、多くの珍品奇品を写し集めている。この直諒のコレクションは、溝口家史料として東京大学史料編纂所に所蔵されている。

（解説／史料編纂所教授：保谷 徹）